

働く老人の所得税について。

大津市立田上中学校3年 竹村 誠

「所得税」とは個人の所得に対して国から課せられる税金の事であり、所得税の税率は所得が多ければ多い程高くなる。我が家は父と祖母が税金を払い僕と弟、母は父の扶養家族となり大きな税金は払っていない。父は税金が高いけど仕方ないと受け止めています。でも税金の高さに不満を感じ、ぐちを言う時がある。我が家で税金の事が一番話題になる時は年三回程あり、父と祖母が言い争います。父がボーナスをもらいまず言う事は「一生懸命働いてもこれだけ税金に取られたらきついわ。」それに対して祖母が「税金を納める成人の数が少ないんや。しゃあないな。」「わかってるわ」と父。この会話が逆転するのが二月。確定申告の時です。祖母は定年退職後老人の年金をもらいながら週四日働いています。年金以外に所得のある人は所得税を納めなければならないからです。「働けば働く程税金も保険も高くなるわ。年金が段々へるしちょっと辛い。けど働かな皆に迷惑かけるしな。」と言う祖母に「働けるだけ幸せやと思わな。」と父。僕はいつも思います。祖母が税金を払ってまで何故働くのか。仕事を辞めたら税金を納めなくても良いのか。税金を払う時、腹が立たないのか。父が税金を払うのは理解出来ます。でも祖母は大きな手術をして今でも病院に通って治療代を払い薬代も払いそれでもまだ所得があるから税金を払わないといけなかったのか。そこで税についての思いを祖母に質問しました。すると次の様な答えが返ってきました。

祖母は昭和二十年九月に生まれました。この年に戦争が終わり戦争に行っていた男の人達が帰国し、団塊の世代と言われる現在の老人達が生まれました。祖母達は戦後の貧しい中育ち中学を卒業してすぐに社会人として働きに出た人達が多くいたそうです。高校に進学した人は少く大学となるともっと少なかったそうです。だから税金を納める人も多く、文化的な生活をする為に一生懸命働いて貯金したのです。その結果、産む子供の数は一人か二人、多くて三人でした。昔文化的な生活を望んで働いた事、将来はゆっくりと余生を送ろうと思っていた事等を話してくれました。一つだけ後悔と言うか残念に思う事は子供の数が少なくなった事。一人や二人しか産まなかった結果が今の納税者の減少という結果の一つでもあると思う。だから昔文化的な生活を送った分、今働いて所得に応じた税金を納める国民の義務を果たし、若い人達の負担を少なくすると同時に高齢者の方を支える力にならなければならないと思う。働ける事に感謝し、まだ納税出来る社会の一員である事に喜びを感じている祖母の所得税論でした。この所得税論、これで良いのか、他に方法はないのか、これからしっかりと考えて行く事が僕達に求められていると思う。